

歴史洞察の技術

東京大学 史料編纂所 教授 博士（文学） 本郷和人氏

日本の社会構造－「地位より人」

日本国の特徴を考えた時に、東アジアという視点を導入した方がいいのではないかと考えます。東アジアどころか世界を視野に収めた時に、日本という国は最近天皇陛下の交替という一大イベントを経験しているところです。10月には即位式が行われ、その後大嘗祭という運びになります。退位した平成の天皇は上皇陛下となりましたが、英語で言いますと、「ヒズマジェスティ エンペラーエメリタス」になります。エメリタスと言いますと、我々はプロフェッサーエメリタス、すなわち名誉教授のことをいいます。ですので、エンペラーエメリタスは直訳すると、名誉天皇となります。エンペラーを名乗れるのは世界で一人です。その他の国々はキングです。世界の生前退位を調べましたら、世界には30余りの王家ありますが、歴史的には浅く、ナポレオン戦争後くらいに王家が築かれました。そして生前退位は普通に行われています。キングであった方が退いた後に、何と呼んでいるのか。英語で言いますと、「リタイアード キング」となっています。つまり、引退した王様で特別な名称はありません。それが普通なのです。退位したキングと、新たに即位したキングあるいはクイーンとの関係は、突き詰めて言いますと、前王の地位は「ただの人」になります。これにはとても驚きました。特別な名称を持っているのは、日本だけです。これを歴史的に見たらどうなのかを過去にさかのぼって調べました。「上皇」という名があるということは、それだけ敬意を持たれているということですが、日本以外の事例がベトナムにありました。ベトナムの陳王朝の時代だけにありました。

天皇と上皇、どちらが偉いのか。

天皇の生前退位は憲法でも定められていませんし、明治以降はありません。上皇が復活しましたが、光格天皇から200年経っています。ですから200年以上前の話になりますが、天皇と上皇のどちらが偉いのかと言いますと、一般的には上皇が天皇を指名するから上皇ではないかと思われるかもしれませんが、朝覲行幸（ちょうきんぎょうこう）という行事があります。天皇が上皇に挨拶に上がることを指します。その逆はありません。それはだいたいの場合、親であったり、兄であったり、あるいは祖父であったりしますから、天皇が上皇に頭を下げるわけです。これは世界に類を見ない。日本の特徴です。今の上皇陛下は皇室典範、日本国憲法に根拠を持っていますから、偉い偉くないということはないのですが、中心にいらっしゃるのには天皇陛下であると言えます。

例えば、中曽根元総理のような大きな功績を残された方が亡くなるという時に、天皇陛下や上皇陛下からお花が届く場合、どちらを上に飾るかということが宮内庁では大問題なのです。これがいわゆるプロトコル（外交儀礼）になります。

以上を踏まえたうえで、日本では地位を降りた人が、そのまま偉いということが多いのではないかと、言うことに気が付きました。一番分かり易い例は、豊臣秀吉です。豊臣秀吉は関白という朝廷で最高の官職を天下人としてのシンボルにしました。鶴松と言う後継者が生まれ、豊臣家も安泰かと思われたのですが、幼少で亡くなってしまい、甥の秀次を後継者として育てました。そして秀次に関白職を譲りましたが、秀吉は先の関白を意味する太閤殿下となって相変わらず天下人として人々の上に君臨していました。つまりは、地位ではない。秀吉という人物そのものが重要と言うことになります。それは徳川家康も同じで、家康も自

分の順列を示す、誰でも分かり易い官職として、征夷大將軍という役職を選びました。ところが、家康も間もなく息子の秀忠に將軍を譲り、江戸城を出て、形の上では駿府城に隠居をするという形を整えました。そうすると人々にとっては、新たな將軍として江戸の主になった秀忠が天下人なのかというと、誰もそうは思わない。やはり、家康は大御所様と呼ばれて、軍事、政治の権限を握り続けています。ここでも、役職、地位ではなく人である、となります。このような事例はたくさん出てきます。

日本の場合、一番良い例は織田信長です。彼は天下人であったのですが、官職的にはどのような優越な官職を持っていたのかといいますと、右大臣にしかありません。その上には左大臣がいたり、関白がいたりしますが、その彼らが信長に命令を下すことができるかと言いますと、そのようなことはできない。まさに地位より人、と言うのが日本です。